

Die Eiche

ディ アイヘ

<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche
Gesellschaft der Präfektur
Chiba

〒270-2214 松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdg-chiba.com



協会Home Page

2025年度の活動に向けて

千葉県日独協会会長 木戸 裕

昨年（2024年）5月に会長に就任し、まもなく1年が過ぎようとしています。会長に就任し思ったことは、当協会は、様々なバックグラウンドをもった会員のお一人おひとりの善意による、暖かいボランティアの精神によって支えられ、成り立っている団体であるということでした。

そのことを象徴しているのが、会員一同が結集して挙行している「ドイツ軍人慰霊祭」です。習志野市には、第一次世界大戦中、中国で捕虜となったドイツ人兵士を収容した俘虜収容所がありました。高校の歴史教科書にも、写真付きで、私どもの「慰霊祭」が取り上げられています。少し長くなりますが引用させていただきます。

「千葉県の習志野俘虜収容所も、1915年から最大で約1000人のドイツ人を収容した。その中には地元の人々との交流をもつ兵士たちもいた。しかし、30名のドイツ兵がスペイン風邪などで亡くなった。そのため、毎年11月の「ドイツ国民哀悼の日」に合わせて、駐日ドイツ大使館関係者や地元の方も参列する慰霊祭がおこなわれている」（清水書院『私たちの歴史総合』p.55.）

昨年も、ドイツ大使館からフート首席公使、ペルズィツケ大佐（駐在武官）、陸上自衛隊習志野空挺団、千葉県、習志野市、船橋市等々の皆様方、地元自治会、千葉県立津田沼高校のオーケストラ部、習志野第九合唱団の方々と、当協会会員一同が相まって、協力しつつ、第30回目となる「慰霊祭」を実施することができました。俘虜収容所で亡くなった兵士たちの墓所が、地元の方々のボランティアによって維持され、「慰霊祭」が、第一次世界大戦からすでに100年以上たった今日でも、故国を遠く離れた異国の地で営まれているという事実に、大きな驚きと深い感銘を覚えたと、ドイツから来られた方々がおっしゃっておられました。

千葉県日独協会は、その設立以来、このように地味ではあっても、心のこもった、見返りを求めることのない、無報酬のボランティアの精神で、日独文化交流の一端を担ってまいりました。

2025年度におきましても、こうした創設以来の考え方を踏襲し、「慰霊祭」を基軸に、市川ドイツデー、習志野ドイツフェア等の地元行事への参加、独日協会アム・ニーダーラインとの交流、さらに文化行事として、総会・記念講演会、新春講演会、青壮年部が鋭意企画する講演会や研究会、ドイツ語講習なども実施したいと考えております。また、一同で楽しく過ごすビール祭り、クリスマス・忘年会なども状況を見て開催したいと考えております。

最後に、たいへん残念なご報告をしなければなりません。我が国を代表するチャターの名演奏者であり、日本チャター協会会長でもいらした内藤敏子会員が昨年8月13日に亡くなりました。内藤先生は、長年当協会理事を務めてくださっただけでなく、協会のいろいろな行事におきまして、その名演奏を会員の皆様にお聞かせくださいました。内藤様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

その一方で、若手会員のご活躍はたいへんうれしいことでした。昨年10月にベルリンで開催された「日独パートナーシップデイズ 2024」に、山本久瑠実理事が当協会を代表して渡独し、現在ドイツ留学中の大野亘児理事とともに、日独の若者交流にご貢献くださいました。

会員の皆様が当協会に寄せる「期待」、「思い」は、すべて同じとは

限りません。協会の在り方についても、皆様、それぞれいろいろなお考えをもっておられます。そのなかで、私としては、「会員一人ひとりが輝く」「誰もが主人公になる」「会員になってよかった」と言ってもらえる千葉県日独協会を目指して、及ばずながら努めてまいっている所存です。それがどうしたら可能となるのか、容易に結論が得られる問題ではありませんが、皆様とともにその方策を考えてまいりたいと思っております。

2025年度におきましても、引き続き会員の皆様からの変わらぬご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新年度に向けての抱負

専務理事兼事務局長 植松 健

いよいよ来年は創立30周年です！

2022年4月に事務局長という大役を拝命してから今日までの3年間、私は無我夢中に全速力で駆け抜けて来ました。そしてその際、常に心掛けてきたことは、「会員への適時適切な情報発信」、「魅力ある日独協会作り」、「若手会員の人材発掘と活躍機会創出と積極的登用」、そしてなによりも「一人でも多くの新規会員獲得」でした。

現在、「会員の高齢化対策」は避けて通れない喫緊の課題であります。何も手を打たなければ、会員の平均年齢は自動的に毎年1歳ずつ上昇します。実際、当協会の半数以上の会員が75歳以上です。残念ながら、年々高齢を理由に退会する会員数は増えています。昨年1年間でも、退会者は11名（物故者含む）に達しましたが、幸いなことに退会者数を上回る12名の新規入会があったため、辛うじて会員数の純減だけは免れることができました。2025年1月現在、個人会員は115名（内名誉会員3名）、法人会員は5社、トータル120名（昨年比1名増）となっています。これからも油断することなく、引き続き会員数を維持するための様々な対策と魅力ある企画に注力したいと思います。

まずは、ホームページの更なる充実と広報活動の強化、Facebook・InstagramなどのSNSを通じての情報発信の継続、会報誌「Die Eiche」の更なる内容充実と継続発行、青壮年部の自主性を尊重しその活動を側面支援し、若手会員の育成と適材適所を目指します。特に回を追うごとに絶大な好評を得ている青壮年部主導の恒例オンライン講演会や2022年1月から続くドイツ語入門研究会（オンライン）の継続実施、そして当協会のルーツでもあるドイツ軍人慰霊祭や新春講演会の開催、船橋市パネル展示、いちかわドイツデー、習志野ドイツフェア&グルメフェスタへの出展等、より地域に密着した広報活動を一層強化し、新規会員獲得に全力を尽くしたいと思います。

千葉県日独協会への入会のきっかけや動機は人それぞれでしょうが、とにかく全ての会員そしてその家族が「千葉県日独協会に入ってよかった！」と思ってもらえるよう、木戸裕会長の強いリーダーシップの下、執行部全員が一致団結してより良い協会を目指して努力を惜しみません。

いよいよ来年2026年6月には、当協会も創立30周年という大きな節目の年を迎えます。記念式典実行委員会を立ち上げ、一人でも多くの会員の意見を反映しながら、一部の会員だけに過度な負担がかからぬよう、一人でも多くの会員のご参加をいただき、全会員の力を結集し成功を目指します。

本年も、引き続き皆様の惜しみないご協力を心からお願い致します。

青壮年部ドイツ歴史研究 衣笠先生講演報告 常任理事/青壮年部長 勝見 浩明

2021年より毎年、会員であり、また神戸大学大学院国際文化研究科で講師をなさっている衣笠先生に近現代を中心とした欧州の住民意識、特に国家帰属との関係において住民意識はどう形成されているのかという点でこの時期、ご講演をお願いしてまいりました。

2024年は、すでに形成されている住民意識が、国際的な取り組みとして強制的に住み慣れた街から追放された事実についての講演をなさってくださいました。具体的には、第二次大戦後の中東欧地区からのドイツ人の追放にフォーカスを当てました。今回の衣笠先生のご講演でドイツ人に課せられた容赦なき仕返し、衣笠先生は、“Vertriebene Deutsche”（追放されたドイツ人）の表現についてもここで使われている元の動詞“vertreiben”の意味には、「家畜を追い立てる」という意味合いがあるとおっしゃってられました。悲劇の事実として当時のドイツ人の状況をドキュメンタリーとして当時の映像含めて解説することは、NHKでも同じ時期に報じていましたが、今回、衣笠先生は、その事実も踏まえながら、強制的な住民移動についての歴史的な背景からご説明されました。

具体的には、「ローザンヌ精神」でした。ドイツ人の強制移住以前に1923年、第一次世界大戦終結後、ギリシャ＝トルコ間で住民交換の協定が結ばれました。この対象になった住民は、過酷な条件で実施されたため苦難を強いられたのですが、国家レベルでの住民移動の実施における正当性の根拠としてこのローザンヌ協定における「ローザンヌ精神」が拠り所となったとは、驚きました。「民族国家を再編するには、住民交換が必要」、この考えには、当時のアメリカ大統領はもとより、チャーチルも同様の考えであったそうです。

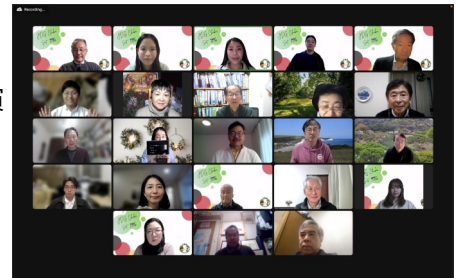
まず、この国家による住民移動の正当性の背景理論が紹介された後、第二次大戦後のドイツ人追放に先立って、ドイツがポーランドを東部併合地域として管理下に置きますが、このときに作成した「ドイツ民族リスト」に基づき、ドイツ民族リスト（I-IV類）、ポーランド系民族に分類わけがなされ、ポーランド民族は、労働従事民族として

意義付けられました。この民族リストが第二次大戦後の中東欧地区に在住する住民の中から「誰が追放すべきドイツ人か」という判断基準でポーランド政府が活用したという経緯は、初めて伺いました。

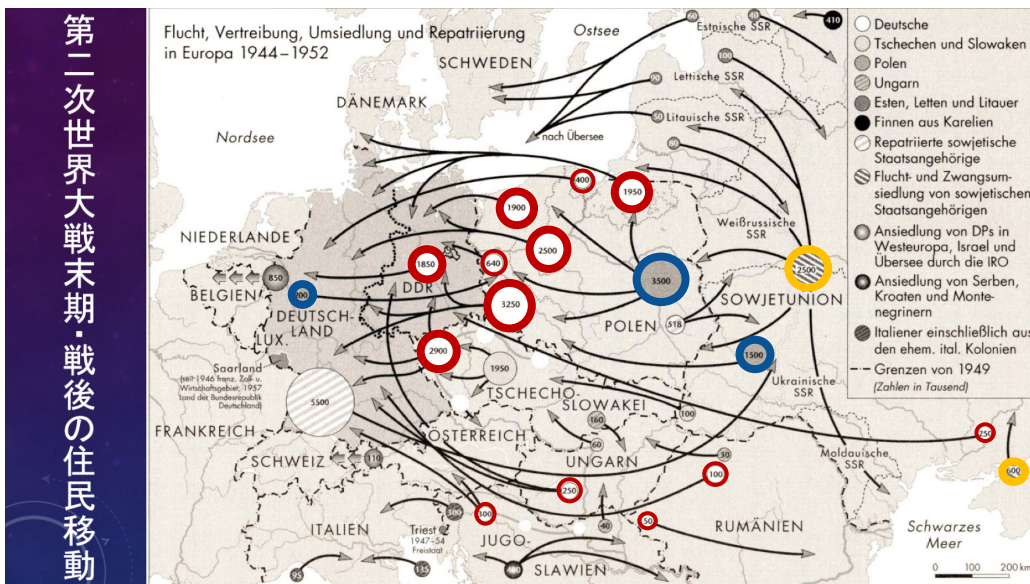
戦後のポーランドの国境線の策定に関しては、連合国による戦後処理構想の中で策定されていったことも説明くださいました。ポーランドに関しては、テヘラン会談（1943年）でスターリンの主張に基づき、ヤルタ会談（1945ポーランドが東部で失う領土に相当する領土を東部ドイツ領から割譲、ヤルタ会談（1945/2月）においてポーランドの西部国境が暫定国境として定められます。

この合意に基づき、ポーランドでは、ドイツ系住民の国外退去の方法について議論、この際にかつてドイツが作成した「ドイツ民族リスト」に基づき、移送対象のドイツ人を特定しようとしたものの、明確にドイツ人とポーランド人を層別することができず、混乱、ポーランドの地区によっては、炭鉱、製鉄業における専門的技術者として恣意的に残留を認められたそうです。最終的には「ポーランド民族と国家への忠誠」を使いこたえて残留となる残留基準が運用されたとのことでした。ハンガリー、チェコにおいても同様のドイツ人追放の動きがなされ、追放対象となった方々には、過酷な運命となっていかれました。これらの動きの正当化ロジックが、冒頭に記した「ローザンヌ精神」に起因しているのは、ドイツ人追放を国家レベルで正当化する考えでした。

命を何とかつないでドイツに戻った人々も移動先の地域では必ずしも歓迎されるわけではなく、ドイツ社会の中で疎外感を抱いたとのことでした。東ドイツを移住先にした人々は、ポーランドと友好関係にあった中で「追放」について公的に語られることはなかったと。衣笠先生の講演は、過酷で悲惨な状況に陥った追放されたドイツ人についても触れられながら、その非人道的な悲劇を引き起こした拠り所とした国家的判断基準、そして実際の追放には、ドイツが過去作成した「ドイツ民族リスト」で追放者を特定しようとしたが完璧な運用ができなかった、首尾よく移転できても社会にはなじめなかった。その歴史的背景とデータ等の資料を駆使くださいました。講演参加の方々からもとても示唆に富んだ講演であったと多くの感想をいただきました。



ドイツ人の住民移動者数と移動先 ポーランド人の住民移動者数と移動先 逃亡、追放されたソ連国籍住民数と移動先



ドイツ東部領土全体	6 980 000
東西プロイセン	1 890 000
ポズナニ	1 470 000
ブランデンブルク	410 000
ニーダーシュレージエン	2 410 000
オーバーシュレージエン	800 000
ダンツィヒ自由市	290 000
ポーランド	690 000
チェコスロヴァキア	3 000 000
バルト諸国	170 000
ソヴィエト連邦	100 000
ハンガリー	210 000
ルーマニア	250 000
ユーゴスラヴィア	300 000
オーストリア	80 000
その他のヨーロッパ諸地域	135 000
ヨーロッパ域外	20 000
総計	12 225 000

第二次世界大戦末期・戦後の住民移動

2025年度の青壮年部の活動について

前号 (No.152) のDie Eichelにて「青壮年部の活動の狙い」について書きました。今回は、前回の基本的な青壮年部活動のベースをもとに来年度どのような考えでこの活動を継続していかようしているのかをお伝えしたいと思っています。

千葉県日独協会の会員の皆様は、どのような局面で会員であることに満足されるのでしょうか。私は、「知る」と「体験する」ことを通じて協会に在籍してよかったと思われるのではないのでしょうか。

知る 体験する

会員の満足度向上サイクル

青壮年部は、まさに組織の活性化（年齢問わず）を目的に設立されました。「知る」については、2024活動からドイツ時事問題やドイツ歴史について隔月で懇談会形式で活動をスタートしました。まだ緒に就いた感はありませんが、まずはスモールスタートしました。これ「共有→知る→検証→進化」のサイクルモデルの中で実践を続けたいと思います。同時に「体験する」については、「音楽を聴こう!」活動にて実際のコンサートに行ってみるという体験活動を行い、現時点で11-12程の実績があります。これは、音楽の体験を増やすこともさることながら、音楽を成立した背景となる欧州文化とその時代背景も知ることができる切っ掛け作りと思っています。

青壮年部の対象は、元来、広く会員を対象に常にオープンな組織です。2025年度は、多くの会員の方々が有されている専門知見を組織内に共有する機会を設け、前年度同様、ドイツの歴史経緯を知る機会、ドイツ社会をより深く知る期間、基盤となる既述の懇談会活動、音楽体験活動など広く多くの皆さんにテーマを共有化に努めたいと思っています。2025年度の活動日程の策定に着手しました。ご要望あれば、是非お願いします。皆様のご参加をお待ちしております。（常任理事/青壮年部長：勝見 浩明）

ドイツ語入門研究会活動報告

顧問 志賀 久徳

2022年1月からスタートした当協会の文化・教養行事の一つである「ドイツ語入門研究会」に参加して約3年が経ちました。

当研究会は元東京音楽大学教授の木戸芳子ナビゲーター(当協会理事)より、「同好の士と、ドイツ語の初歩を共に学ぶ場を持ちたい。教場ではなく、受講料無料で試験も評価なく、受講者は教材の購入のみを必要とし、ドイツ語を初級から無理なく学びたい会員の方々にZoom参加の場を提供したい」との意向から始まったものです。

研究会は毎週火曜日と木曜日の午後7時30分から8時10分に開催され、参加者は自由な雰囲気の中で楽しく学んでいます。毎回、ナビゲーターより教材に加えて次回用に作成された資料がメール送信されてきますので、現役の方で参加できなかった日でも自習が可能です。

また、Zoomによる自宅学習は通学も不要でとても効率的です。

入門用教材はこれまでで通算4冊目に入っており、昨年9月より「身近なドイツ語-しゃべりたくなる10のトピックス、教育・生活・物語編」朝日出版社を使用しています。

入門した私は、昔、ドイツ駐在の経験がありながら英語で通じたため、ドイツ語は入門研究会が初めての学習ですが、わからなくても丁寧に教えていただけるので続けられています。

定員は10名程度で会員限定、そして自由参加なので仕事などの都合から休会者もありますので、いつでも問い合わせ可能です。

ドイツ語のみならず、ドイツ事情、話題等にも触れてみたい方々に是非ともお勧めしたい研究会です。

お問い合わせ先：千葉県日独協会 E Mail : info@jdg-chiba.com



現在使用中の教材

Glühweinパーティ参加報告

会員 橋本 仁

2月8日土曜日、在日ドイツ大使館付武官であるベルズィック空軍大佐よりご自宅での“Glühweinabend”にご招待を受け、16名の千葉県日独協会会員及び関係者が伺いました。

当日は、多少風はあるもののお天気にめぐまれ、まずはご自宅の庭で大佐お手製の温かいGlühweinをみんなで堪能。柑橘系の甘い香りを楽しみながら、やはりGlühweinは屋外でフワフウ言いながらいただくのが最高と感じた瞬間でした。

その後、屋内に移動してワインやビールをお供にビュッフェスタイル中心の美味しいお料理をいただきながら歓談。抹茶がお好きという奥様とも話はずみ、抹茶ビールを初めて味わう機会にもめぐまれました。最初はおっかなびっくりだったものの、なかなかどうしてふんわりと抹茶のフレーバーが漂うビールに十分満足。ポイテル瓶のフランケンワインもサーブされ、お酒好きにはたまらない豊富なラインナップです。室内には大佐ご夫妻の出身地 Bambergの風景や5人のお子様たちの写真も飾られ、会話からも故郷やご家族へのあたたかい想いが伝わってきました。このような大佐ご夫妻のホスピタリティあふれるおもてなしにあつという間に時間が過ぎてお開きに。大佐ご夫妻に見送られ、一同大変満足して家路につきました。ご招待くださいました大佐ご夫妻に改めて感謝申し上げます。



息子たちとともに体験したドイツ



ドイツと私

ドイツと私 - 片山 麻里

2018年5月、当時ベルリンのハンスアイスラー(Hanns Eisler)音楽大学院で学ぶ長男に一人で会いに行きました。ドイツ語が全く分からず、ハブニングもたくさんありました。

ベルリン空港の検査では荷物を開けられ、重いスーツケース2つと降りようとした地下鉄のエレベーターは故障中、待合せ駅と名前の似る別の駅に行ったり、こちらに向かってくれた長男の電車が止まったり、民泊先を見つけられず2時間も遅れチェックインが夜に変更されたり、行先を確かめるうち電車を何本も見送ったり、帰りも空港で靴の裏をチェックされたり。私はドイツに歓迎されていない？

けれど懲りずに翌年もベルリンへ。さらに2024年1月、今度は日本の大学院2年の次男が1年間程滞在していたバートゴデスベルグ(Bad Godesberg)やオーバーハウゼン(Oberhausen)などを訪ね



ご子息長男、筆者、長男の友人

ました。

以下は私の（偏った）ドイツの印象（の一部）です。

●看板がなく街並みが綺麗

しかしどこも同じように美しい為、家が探しづらいです。

●建物が素敵

けれど、趣のある建物にはエレベーターがなく、長男は私の重いスーツケースを5階の自室まで、その後3階の民泊まで階段で運ぶことに。

●意外な所に物乞い

大音量のスピーカーで電車の中で演奏する人、赤ちゃんを抱いて教会の入り口で大きな声で紙コップを突き出す人。

●親切

フランクフルトでの乗換え時、搭乗ゲートの掲示板まで案内してくれた隣席の青年、地下鉄のホームへスーツケースを下ろしてくれた方、バレード中の道で民泊を探していた時「今通って！」と道を空けてくれた皆さん。

●都会の自然

ベルリンのティアガルテンに野生のうさぎ。シュプレー川ではボート漕ぎも。

●芸術の価値

コロナ禍の2020年7月に、外国人学生である長男がユダヤ人関係の式典でクラリネット演奏の機会をいただいた時、違いを強く感じました。

●自宅に泊める

次男の友人のご実家に急遽3泊もお世話になり、毎朝素敵な朝食も用意してくださいました。また、羽田空港で知り合ったエッセンの方に連絡したら、「ぜひ会いましょう、家に泊まってくださいな」え？！ドイツ人は近くにいるのにホテルを取ると、「うちでは不十分なのですか」と思うのだとか。



ご子息次男の友人、筆者、次男

あれ？振り返ると、楽しい思い出や良い出会いが実は多かったのですね。息子達が二人ともお世話になったドイツに、改めて感謝と敬意を持って文化や言葉を学び、さらに親しんでいきたいです。

新入会員紹介（堀 智弘）

私は習志野市内で和菓子店を営んでおります。

2022年にミュージシャンの友人田所ヨシユキ君と、習志野俘虜収容所でのドイツソーセージ製法伝承を題材にした歌の入ったCDを製作し、曲の完成についてドイツ大使館とホームページなどを参考させていただいた千葉県日独協会にも報告させていただきました。

その時からの協会員さんのご対応やいただいたDie Eicheを通して、会員の皆様のご活躍や親しみ安さを感じておりました。

私はドイツ渡航歴はありませんが、1919年にドイツ兵俘虜がスペイン風邪の治療を受けたという病院で生まれていた事実を最近知ったのも何かのご縁かなと感じ、植松事務局長



桜まつり

からのお声掛けもあってこの度入会させていただきました。

今後はこの歌を通して習志野俘虜収容所の史実を伝えるべく、微力ながら貢献出来ればと思っております。

どうぞよろしくお願い致します。

書籍/Buch

■ドイツの心ととのうシンプルな暮らし365日

-ロジカルでありながらやさしい人たちが育んできたこと-

久保田由希 著 (YUKI KUBOTA)

自由国民社 定価1870円(税込み)

2022年10月に青壮年部主催により開催されたオンライン講演会の講師をお願いした、

久保田由希氏の新刊「ドイツの心ととのうシンプルな暮らし365日」が出版されました。

この本とは書店店頭で偶然出会い、チラッと読んですぐ購入しました。

1日1ページ1テーマを写真と文章で取り上げた、365日のドイツの暮らしの本です。

話題はドイツの文化や食べ物、風習、気候などいろいろで、筆者のドイツ長期滞在の経験を基に、ありのままの日常が書かれています。

ドイツ在住経験者には、そうそうと共感できる内容があり、あまり知らない人には新しい発見があります。

例えば1月1日は「花火で明ける新年」、3月31日は「夏時間の始まりで気分は人生上り坂」、4月1日は「花の到来、イースター」等、ドイツの空気が伝わってきます。

ドイツ人の合理的にシンプルに、それでも満ち足りた気持ちで暮らす心地よい生活のヒントが毎日満載されています。

読者はドイツへ行かなくても、ドイツで暮らしている気分になれる本です。

(顧問：志賀 久徳)



今後の予定

■理事会

日時 2025年4月12日 (土)
1600~
場所 船橋中央公民館第9集会室

■年次総会、記念講演会

日時 2025年5月10日 (土)
場所 船橋中央公民館音楽室
総会 15:30-16:30
記念講演 16:40-17:40
講師 青山 彌紀 会員

会員情報

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、(株)京葉ビル管理、(株)和幸電気工事、バイエルンストゥーベ by ダンケ

新入会員 城 宏和 浦安市

編集後記

2025年度の活動が目前となってきました。運営委員体制 (Die Eiche No.151にて紹介) の中で将来設計を担当しておりますが、設立30周年の節目には、これまでの歩みを振り返り、将来の千葉県日独協会の将来を会員の皆様と共有できるよう準備しておきたいと思っています。P.2において「2025年度の青壮年部の活動について」でも記しましたが、組織の活性化、つまり「知る」と「体験する」の二つの観点で青壮年部を活性化の活動エンジンにしたいと思っています。これまで以上に皆様にもお声がけをしていきたいと思っています。引き続き、よろしくお願いいたします。(勝負)

